

注目のキーワード「芸術の秋」

秋というと色々なことばが浮かんできます。読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋、そして芸術の秋。最近は芸術よりもエンタメ(エンタテインメント)の方を聞くことが多いですが、秋というと「芸術の秋」で、エンタメ系は「夏フェス」「ライブの夏」と夏のイメージが強い感じがします。秋の落ち着いた雰囲気は、エンタメよりも芸術の方に合うのでしょうか。

音楽や動画はスマホや家庭の大型モニターで楽しむこともできますが、劇場などに行って観る・聴くのはまた別の体験としての要素があります。チケットを買う時から、劇場に入る、席に着く、客席が暗くなる、そして…という一連のプロセスは、鑑賞の楽しみの一部といっても良いでしょう。

また「観客(聴衆)はもう一人の演者」とも言えます。客が真剣に観て聴いていれば、演奏者や演者も乗ってきます。一方で欧州のある一流のオペラハウスでは、オペラ公演で出演者が一音間違えかけただけで、客席に「静かなざわめき」が走ることもあったそうです。そのような厳しい聴衆が、演奏家を育てていくのでしょうか。演奏家(俳優)は移動できますが、観客は連れていけません。有名な劇場・ホール(劇場やホールもまた「一人の俳優・楽器」ですが)、音楽祭・演劇祭に行く意味の幾分かは、観客の反応を感じることにあると私は思っています。

また、思いがけない出会いがあるのも生の楽しさ。いろいろな作品が楽しめるフェス等で、偶然出会った作品が一生の宝となるかもしれません。「チケット代と時間を返せ」と言いたくなる演奏会・公演も多くあるでしょうが、あまり事前に品定めして無難なものばかり選ぶのも野暮というもの。多少の「授業料」を払うことは必要でしょう。知られていない芸術はたくさんあり、例えば最近の映画で話題の舞踊家の踊りも、実は海外では舞踏(butoh)として以前から評価されてきたものです。

何かと物騒な世の中で何が芸術だ、と思われる方もおられるかもしれませんが、感じることは生きること。異質なものを感ずることで、人は刺激を受け、進化します。この秋、舞台や音楽の“生”の力を、私たちみんなで感じてみませんか。

(総合調査部 政策調査グループ 研究理事 重原正明)

時事雑感

西暦で5の倍数年は、国勢調査が行われる。国勢調査は1920年(大正9年)に開始され、戦後の混乱期を除けば、原則として5年に一度行われており、今年の国勢調査は22回目となる。

国勢調査の目的は、国内の人口や世帯の実態(就業状況など)を把握し、地方交付税の分配など様々な行政に活かすことにある。このため、国勢調査は最も基本的で重要な統計と位置づけられており、調査項目や調査頻度などに違いはあるものの、海外の大半の国で定期的実施されている。

調査の対象は国内に住む人全てで、調査への回答は義務となる。調査項目は時代とともに変化している。以前は就業時間や住宅の床面積なども調査項目となっていたが、今は無くなっている。代わりに、現在の居住地に住んでいる期間など、人口移動の把握に関する調査項目などが追加されてきた。

国勢調査から得られる情報のうち、最も注目されているものの一つが人口動態だろう。日本の人口は2010年の1億2808万人をピークに減少傾向に転じている。人口減少の要因として、経済環境、世帯構成の変化、結婚観・人生観の変化、子育てコストなど様々な要因が指摘されている。しかし、人口減少に歯止めをかける有効な対策は打ち出されておらず、合計特殊出生率は2024年には統計開始来最低の1.15まで低下した。人口の維持には合計特殊出生率が2.07程度となる必要があるとされている。このままだと、日本の人口は加速度的に減少していくことになる。

国勢調査の結果を受けて、日本の将来人口推計を行っているのが国立社会保障・人口問題研究所だ。2023年に公表された直近の予測によれば、中位推計(出生・死亡とも中位)でも2056年には人口は1億人を割り込み、その後も減少を続ける。今年の国勢調査結果を受けた予測は2028年に発表される見込みだが、そこではさらに予測人口の下方修正が行われよう。人口の減少は経済活動や財政に大きな弊害をもたらす。新内閣の課題は山積しているが、国勢調査結果を活かして人口減少に歯止めをかけるための有効な政策も待たないだ。(嵯峨 義清)